

# パウロの小アジア伝道旅行

— ヨハネの黙示録に表された七つの教会を中心として —

天 野 武 男

## I はじめに

ヨハネの黙示録 2-3 章に記されている紀元 1 世紀中ごろの古代教会、ラオデキヤ（現在のデニズリ）、フィラデルフィア（アラシェヒル）、サルデス（サルト）、エペソ（エフェス）、スミルナ（イズミル）、テアテラ（アクヒサル）、ペルガモ（ベルガマ）を本年 3 月にフィールドトリップとして参加する機会が与えられた。

Southwestern Baptist Theological Seminary の新約聖書学者、James Wicker 教授の旅行中現地で行われた講義と、2004 年 6-7 月に行われた同教授の夏期講座、新約聖書学を受けたときの講義ノートをまとめたものである。なお引用する聖書と地名人名は全て新改訳聖書（日本聖書刊行会）1988 年第 2 版による。

## II パウロの生い立ち

パウロがいなければ今日のキリスト教はなかったと言っても言いすぎではない。その人と生い立ちを簡単に記してみよう。



パウロ

パウロはユダヤの名前がサウロであり、紀元 1 年ごろ、小アジア（現在のトルコ共和国）のタルソで、パリサイ派に属する敬虔なユダヤ教徒の両親に、生粋のユダヤ人として、ローマ帝国市民として生まれた。両親はおそらく裕福な天幕の製造販売業者であり、モーセ律法を守り、神に選ばれたユダヤ民族としての熱烈な愛国者であった。彼の生まれながらの武器は、生まれた地域での世界共通語、コイネギリシャ語とその文化、両親から受け継いだローマ市民権、ユダヤ民族の証しであるユダヤ教の家庭教育の三つであった。13 歳でエルサレムに行き、当時の最高の学識と高潔な人格をあわせ持つパリサイ派律法学者であったガマリエルに師事した。イエスを信奉するステパノの石打刑を見届けたあと、執拗にイエスとその仲間を徹底的に迫害し続けた。イエスの仲間を追い求めてダマスコへの途中、イエスの天からの光によって 3 日間失明したあいだに、自分の誤りに気づいて、イエスへの最強の迫害者から 180 度転回した。それ以来キリスト教をユダヤ人のみならず当時の世界の中心であったローマ帝国に伝えた大使徒となったのである<sup>1)</sup>。

### 1. 第 1 回伝道旅行

ルカによる使徒行伝には、ルカの目を通したパウロの行動と彼の信仰の姿が詳しく記されている。第 1 回の伝道旅行<sup>2)</sup>は、紀元 46－48 年の 2 年間を費やして、シリアのアンテオケ（アンタクヤ）を出発地として、セルキヤ、キプロス島の二つの港町サラミスとパボス、ベルガ、アンテオケ（小アジア地方）、イコニオム（現在のコンヤ）、デルベ、デルベを折り返し点としてイコニオム、アタリヤ、シリア アンテオケの順路である。この目的は、小アジアへの伝道であった。

### 2. 第 2 回伝道旅行

さて、第 2 回目の伝道旅行<sup>3)</sup>は 49 年から 52 年、ギリシャへの伝道を目的としていた。出発地はアンテオケ、タルソ、ルステラ、イコニオム（現在のトルコ中南部コンヤ）、トロアス、ネアポリス、ピリピ、アムピポリス、アポロニヤ、テサロニケ、ベレヤ、アテネ、コリント、エペソ、カイザリヤ、エルサレム、北上してアンテオケに帰る旅程であった。

### 3. 第 3 回伝道旅行

第 3 回目<sup>4)</sup>の伝道旅行は、53 年から 57 年の 4 年間、シリアのアンテオケ、タルソ、デルベ、ルステラ、イコニオム、アンテオケ、ヒエラポリス、エペソ、トロアス、ピリピ、アムピポリス、アポロニヤ、テサロニケ、ベレヤ、アカヤ、アテネ、コリント、テサロニケ、ピリピ、ネアポリス、トロアス、アソス、ミレト、リンドス（ロード島）

パタラ、ツロ、トレマイ、カイザリヤ、エルサレムの旅程で、その目的は、小アジアの首都エペソへの伝道であり、小アジア一帯に福音を根付かせることであった。

#### 4. 第4回伝道旅行

第4回<sup>5)</sup>が61年から63年であり、エルサレム、カイザリヤ、シドン、クレタ島のフェアヘブン、マルタ島、シラクサ、レギオン、ポテオリ、アピオポロ、トレス・タベルネ、ローマへの旅であった。この目的は、ローマ宣教とローマ市民としての特権であるローマでの裁判上訴であった。

## Ⅱ 七つの教会

### 1) パウロとバルナバ

第1回伝道旅行の後、「エルサレムでの使徒会議」<sup>6)</sup>が行われて、ペテロの主張がエルサレム教会の指導者であったイエスの弟、ヤコブによってまとめられた。つまり、

- ① 神は、ユダヤ人と同じく異邦人にも聖霊を与えること、
- ② 人は、恵と信仰によって救われること、
- ③ 異邦人にモーセ律法を厳格に強制するのは、神の意思に反すること、

である。これが、ユダヤ教の一宗派として出発したイエスの教えが、全く新しいキリスト教として認められる原点となった。パウロはバルナバに前回イエスの教えを伝えた小アジアの町の人々はどうしているか、訪ねてみようと言案した。お互いに意見が一致した。しかし、伝道方針の違いによってバルナバは故郷キプロス島に向けて従兄弟のマルコ・ヨハネ（マルコの福音書の著者）を伴い、パウロは故郷タルソに向けてローマ市民でもあるシラスを伴いそれぞれアンテオケ教会を出発した。シラスは預言と説教に秀でていた。

パウロとシラスは陸路を選び、パウロの故郷タルソからキリキヤ州を經由してデルベ、ルステラへと進んだ。ルステラには青年テモテがおり、彼は信仰が篤く広く人々に信頼されていた。このテモテを加えて、3人の同行者となった。一行はイコニウム（トルコ中南部コンヤ）、アンテオケ、ラオデキヤ（デニズリ）へと進んだ。

### 2) ラオデキヤ

黙示録<sup>7)</sup>では、3章20節に、

見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。

とある。

しかし、現在は一面の廃墟であり、競技場、劇場、アゴラ、教会、大理石の街路の痕跡のみであった。発掘作業はまだまだである。東南にあるコロサイ地方からは冷たい水が流れ込み、西北からは温かい水が入り込んで、黙示録 3 : 15-16 には、

「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。

このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口から あなたを吐き出そう。

と、生ぬるさを批判している。

ラオデキヤは、コロサイから 16 キロ、ヒエラポリスから 10 キロに位置している。この都市の成り立ちは、紀元前 261-247 年にシリアのアンテオコス 2 世が造り、自分の妻ラオデスにちなんで名づけた。当時の住民はシリア人やバビロニアからのユダヤ人であり、首都エペソからの主要道路に当たり、紀元前 190 年にはローマ帝国の有名な商業、金融都市となった。また黒羊の羊毛、「フィリギヤ産粉末」の目薬として有名であった。コロサイ人によれば<sup>8)</sup>、エパfrasによって建てられたと思われる。南部からの水は、水源地では冷たく、または温かくあったのに、10 キロの用水路を経由すると生ぬるい水となってしまうような住民の全てにおいて妥協する性質を特徴となるようになってしまったのだろう。比較的保存のよいローマ劇場と三つのキリスト教会、ネクロポリス、競技場、用水路がそれぞれ痕跡を留めている。現在のデニズリは、人口 35 万人である。

### 3) フィラデルフィア (アラシェヒル) <sup>9)</sup>

パウロの一行はラオデキヤを発ち、ヒエラポリスを経由してフィラデルフィアに到着した。

黙示録 3 : 8-9 では、

「わたしは、あなたの行ないを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。

見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。

と記されている。このフィラデルフィアの教会は例外的に信者の誤った行いに対して

非難されていない。むしろ、「兄弟愛」を示す町の教会は奉仕に対する障害や良い機会を経験しており、イエスはこの教会に敵対者や困難を取り除き、神はフィラデルフィアの住民に名誉を与えると約束している。この町はサルデスからペルシャ帝国の首都スサへの交通の要塞に当たり、重要な地理的位置を占めていた。

ファント<sup>10)</sup>によると、カルテバスとして知られる初期の定住者は、ギリシャ人の町の建設より数百年もさかのぼることが出来る。ペルガモの王であった兄弟ユメネス 2 世（紀元前 197－159 年在位）と弟アタラス 2 世フィラデルフェウス（紀元前 159－138 年在位）がヘレニズム文明の担い手としてこの町を再建設したのである。弟の呼び名フィラデルフェウス（兄弟愛）が兄王に対する兄弟愛としてこの町に名づけられた。しかし、紀元 17 年の大地震によって破壊された。その後「小アテネ」として紀元 5 世紀まで発展したが、それからはクリスチャン人口が多くなった。1391 年オスマントルコによってイスラム化されてしまった。今日では、「アラーの町」を意味するアラシェヒルとして知られている。

#### 4) サルデス（サルト）

パウロが向かった次の目的地はサルデス<sup>11)</sup>で、黙示録 3：1－2 では、

また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。

目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。

と記されている。つまり、霊的には死んだのも同然と思われた。精神的な墮落や迫害も記されていないが、「目をさましなさい」と言いつけられており、イエス・キリストへの奉仕に対して眠っている状態だと見なされた。

紀元前 300 年に建設されたアルテミス神殿は、エペソのそれと同じ規模であったが、完成までには至らなかった。その城砦と共同墓地は紀元前 700 年までさかのぼる事ができる。ユダヤ教の会堂跡は興味深いもので、大部屋の床はモザイク模様できれいに保存されていた。中央の部屋には二つの石で形作られた座席があり、一つはモーゼのため、もう一つはトーラーを収めた契約の箱のためだったかもしれない。ローマ帝国時代の遺跡が小アジアにおいて一番保存状態がよいのはこのサルデスである。その中でアルテミス神殿とゼウス像は巨大であり、神殿の柱 2 本は当時の原型をとどめるように再現されている。神殿の後ろにはよく保存された 5 世紀のビザンチン風教会跡が

残されている。

## 5) スミルナ (イズミル)

サルデスからスミルナまではバスで 1, 5 時間、距離は 70 キロ、エペソの北 55 キロに位置している。黙示録 2: 8-11 では、

また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。『初めてであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。

「わたしは、あなたの苦しみと貧しさを知っている。——しかしあなたは実際は富んでいる。——またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。

あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。

耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。』

と記されている。スミルナの信者たちはキリストへの信仰によって迫害を受けるが、でもイエスに忠実を尽くそうとした。物質的には貧しいが、信仰による豊かさを持っている。彼らは信仰を持ち続けて恐れを抱かないようにと諭されている。スミルナという町の名前は「苦い」を意味しており、「没薬」と関係がある。ファント<sup>12)</sup>によるとホメロスの生誕の地と言われている。ローマを熱烈に支援していたので、自治の特権が与えられていた。

スミルナは小アジアにおけるクリスチャン迫害の中心地でもあった。シリア・アンテオケ教会の司教イグナチウスは、迫害されてローマへ護送される途中、このスミルナで 4 通の手紙を書いている。また、スミルナの司教ポリカールはヨハネの親しい友人であったが、およそ紀元 156 年におそらく 90 歳で迫害を受けて殉教している<sup>13)</sup>。

スミルナ、現代のイズミルは人口 300 万人を超えて、トルコ第三の大都市である。かつてはエペソやミレトスが占めていた港の役割を、今ではイスタンブールについてイズミルが第二の港としての重要な位置を受け継いでいる。

## 6) テアテラ (アクヒサル)

スミルナの東北 80 キロに位置するテアテラは、紀元前 300 年にセレキウスニカ

トールによって造られたが、考古学上は紀元前 3000 年までもさかのぼる事が出来るといわれる。戦略上余り重要な位置ではなかったが、アルテミスとアポロ崇拜は盛んであった。

黙示録<sup>14)</sup>の 2：19-20 では、

「わたしは、あなたの行ないとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行ないが初めの行ないにまさっていることも知っている。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。

と述べている。

テアテラでは綿製品、革製品の交易として知られており、ヨーロッパで最初のクリスチャンとなったルデヤの生まれ故郷であり、ローマから移って以来紫布を手広く商って、パウロたちの宣教活動に物心ともに多くの支援を与え続けた<sup>15)</sup>。パウロが開いたエペソの教会からはこの町を伝道して、愛、信仰、奉仕と忍耐に成長する教会と黙示録に記されているが、偽女預言者や異教の教えも受け入れて世俗化しすぎてしまった<sup>16)</sup>。

今日では当時の面影はなく、今ある一番古いモスクは、ウルジャミィ（偉大なるモスクの意味）と呼ばれて、もともとはローマ時代の神殿であった。ビザンチン時代の教会を経て 15 世紀ごろモスクに改造されて、ほとんどのトルコの古い建物が辿った同じような変化を反映している。

## 7) ペルガモ（ベルガマ）

海岸線から 25 キロ、スミルナの北方 80 キロに位置するペルガモは古代アジアにおいてアテネとアレキサンダー大王の強力なライバルであり、紀元前 8 世紀ごろ造られた。ヘレニズム時代には重要な位置を占め、ローマ帝国によるアジア植民地の首都でもあった。産業はあまり発展しなくて、学問の町、特に医学に優れた町として知られていた。

黙示録<sup>17)</sup>では、2：13 において、

「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。

「サタンの王座」と記されている。しかし、よく読むと、町の人々は勇気を持ち、信

仰に励んで、迫害にも毅然とした態度で立ち向かったことが分かる。

アレキサンダー大王の死からこの町の歴史が始まったと言ってよい。大王の遺産を手にした 4 人のうちの一人リシマコスがシリアとの戦いで戦死、その部下フィレタイロスがその財宝を基にペルガモ王国を築き上げた。このペルガモ王国はアッタロス王朝を開いた甥のエウメネス 1 世によって繁栄した。ローマとともに当時の大国シリア帝国と戦って、小アジアの交易権を得て、ギリシャ文化を取り入れたアクロポリスの建設を行い、ローマの属州となった後もヘレニズム都市としての繁栄を維持した。王宮跡にローマ皇帝ハトリアヌスが建設したトラヤヌス神殿はすべて大理石で、コリント様式もあるがイオニア様式を取り入れた典型的なヘレニズム文化を反映している。

ここの特記事項は図書館と医療センター、アスクレピオンである<sup>18)</sup>。まずは図書館を取り上げてみよう。当時世界一はエジプトのアレキサンドリア図書館で蔵書 70 万巻、第二位はこのペルガモで 20 万巻、そして第三位がエペソのケルスス図書館、2 万巻を所有していたと言われる。エジプトはペルガモ図書館に脅威を覚え、パピルスのペルガモへの輸出を禁止したところ、エウメネス 2 世（紀元前 197-159 年）はそれに替わる羊皮紙を発明した。これが羊皮紙のドイツ語名ペルガモントの語源である。ところが紀元前 41 年アレキサンドリア図書館が焼け落ちたので、ローマのマーク・アントニーがペルガモから 20 万巻の書物を持ち出して、クレオパトラへの贈り物として差し出した。残ったわずかな書物は長らく保存されたが、紀元 7 世紀にカリフ・オマールはコーランと矛盾するとして全て処分してしまった。もう一つの特徴は医療センターとしてのアスクレピオンである。癒やしの神であるアスクレピオスは、その象徴がヘビで、治療施設には図書館、聖なる泉（浴室）、劇場、培養施設などが付属しており、治療方法は、食事療養、温水冷水浴、薬だけでなく泥を使った治療、リハビリ、礼拝、観劇などであった。

二匹のヘビは今日の医者と、薬局を象徴して柱にも刻み込まれている。人々は脱皮するヘビは神秘であり、脱皮を「生まれ変わる生き物＝生物」としてとらえていたようである。

当時病人やその代理人が生贄を捧げて参拝して、その後入浴して体を清めて宿泊した。見た夢を神官が判断を下して、治療法を教えた。異邦人の宗教では、ある男はヘビが器に入った水をヘビが飲むのを見て、後にその男が同じ器の水を飲んだところ病から癒されたことが分かって、ヘビのシンボル化が起こったと言う。評判を聞いた患者はあちこちからやってきたことでわかるように、回復率はとても高かったとも言われている。治療施設の手前にはトンネルがあり、健康の維持、回復の治療と信仰礼拝



が同時に行われていたと考えられる。トンネルは、「俗世間」と病の治る「神聖な場所」の境界でもあった。トンネルの上部にはスピーカーの役割をする穴があり、ここから病人に治る暗示の言葉や、励ましの言葉をかけて、今日のいわゆる精神療法が行われていたと思われる。しかも治療代は無料であり、その代わりに献金が求められた。昼食は有料であったが、払えない患者は自分の詩を作って捧げることも出来た。

アクロポリスにある赤い教会は、元来紀元 2 世紀のセラピス神殿であった。当時の土台を基に、赤いブロックを利用して 5 世紀にキリスト教会に転用したのである。丸い二つの部屋が後に付け加えられて、七つの教会では一番規模の大きい建物である。外側の壁は 15 メートルもあるが、後にイスラム教徒によってモスクに模様替えされてしまった。トルコでの典型的な三つの宗教形式、つまり異教、キリスト教、そしてイスラム教の影響を色濃く残している場所である。

#### 8) アレキサンドリア・トロアス（トロイ）<sup>19)</sup>

小アジアの西北海岸のトロイから南に 34 キロ離れたトロアスは、紀元前 3000 年ごろの初期青銅器文明からトロイの発展が始まったといえよう。紀元前 2500-2000 年にはエーゲ海の交易の中心地となり繁栄したが、栄枯盛衰を繰り返して 9 層にわたる都市遺跡を残している。紀元前 1200 年頃のトロイ戦争で 10 年間の攻防を繰り返して滅亡への道を辿る事になった。それからはイオニア人が殖民、アレキサンダー大王が、コンスタンチヌスがこの地で戦っている。トロアスは紀元前 310 年頃アンテゴニウス 1 世・モノファサルマスが造り上げて、自分の名前をつけた。しかし、マケドニアの王リュシマコウスがアンテゴニウス 1 世を紀元前 301 年頃戦死させた後、アレキサンダー大王にちなんでアレキサンドリアと名づけた。トロイに近い距離だったのでアレキサンドリア・トロアスと呼ばれるようになった。自由都市となったが、アウグスチヌスによってローマの植民地となり、商業で繁栄するようになった。

パウロがアジアからヨーロッパへの行きかえりに経由した波止場はもう埋め立てられており、存在してなかった。「マケドニア宣教」の幻<sup>20)</sup>を受けたパウロは第 3 回の伝道旅行の途中 1 週間立ち寄り、説教の途中に眠り込んで 3 階から落ちて死んでしまった青年ユテコを生き返らせたのはこの地である<sup>21)</sup>。この地には医者ルカもやって来て、パウロ一行に加わって 4 人となった。

トロイの木馬で知られているトロイは、1871 年にハインリッヒ・シュリーマンが発見した有名な場所であるが、彼の 18 ヶ国語を操る語学学習をまとめると、毎日勉強して、

- ① 大きな声で音読する事,
- ② 訳をしない事,
- ③ 作文を書いて、先生に添削してもらい暗誦すること,

と薦めている<sup>22)</sup>。またシュリーマンはアメリカのカリフォルニア州のゴールドラッシュで儲けたお金をトロイ発掘に費やしたことは余り知られていないようだ。

パウロ一行がトロアスを船出して、ネアポリスに上陸、陸路をマケドニアに向かい、ピリピに到着したことで、ついにキリスト教がヨーロッパに渡ることとなった。パウロはマケドニア伝道の拠点としてピリピを選び、伝道に力を注いだ。この地の成果は紫布を商う女商人ルデヤの家族が、心を開きイエスの福音を信じて洗礼を受けた事である。ルカはこのピリピに残り、シラスとテモテはパウロと共に、北部ギリシャの町アムピポリス、アポロニヤを通してテサロニケに到着した。テサロニケの会堂では、土曜日の安息日ごとに説教をして福音を説いた。次にベレヤに行き、シラスとテモテを残して、パウロは単身アテネに足を向けた。

#### 9) アテネとコリント

アテネはギリシャの大都会で、学問と文化の中心地でもあり、知識、知恵、芸術が関心の的であり、この三つを与えるギリシャの神アテナを礼拝していた。パウロは、美術の粋を尽くし、偶像を礼拝する人々の心の腐敗を嘆き、失望した。学者たちはパウロを学問上の裁判所とも言うべきアレオパゴスに招いて、話をさせた。その演説の要旨は<sup>23)</sup>、

- ① 宇宙を創造した天と地の主である神は、人の手で造った神殿には住まないこと,
- ② 神はすべての人をひとりの人から造ったこと,
- ③ これまで神は人が像を造り拝むことを赦していたが、今では悔い改めを求めていること,
- ④ 神は、イエスをメシヤ(救い主)として地上に送り、すべての人の罪を引き受けて十字架の上の死でその罪を贖わせて、死者の中からよみがえらせたこと,

の4点であった。聴衆の中には、反発や軽蔑を示す者もいたが、この説教を聴いて信仰の道を歩き始めた人もいた。その人たちは、裁判官デオヌシオやダマリスという女のほか数人であった。

次の訪問地はアテネと違う、商業の中心地コリントである<sup>24)</sup>。崇拜された神は、エ

ロス、快樂、商売繁盛を導くアフロディーテであった。キリスト教の宣教には、学問の町アテネが商業地で頻繁に見られる不正や淫行がはびこっているコリントよりもふさわしいと考えられるが、事実は全く逆であった。福音は学者の行う学問研究の対象ではなく、あくまでも個人の神との関係を突き詰めて考える信仰に裏付けられた体験を重要視するからである。コリントでは、ローマ皇帝クラウディオの出した勅令によってローマを追放されたユダヤ人テント職人夫婦アクラとプリスキラに会い、福音を説いてイエスの信者とした。ある日シラスとテモテが贈り物と資金を持参してパウロの手助けとなった。次にパウロが向かう町はエペソである。

#### 10) エペソ (エフェソ)

第3回伝道旅行<sup>25)</sup>は小アジアのエペソへの伝道目的であり、小アジア全体に福音を根付かせることで、テモテとルカを同伴者にして紀元 53―57 年に行われた。黙示録<sup>26)</sup>では、2：2―4において、

「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。

あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。と、イエスへの愛を捨ててしまったと非難を受けている。

エペソの成り立ちは4回にわたっている。ギリシャ人が紀元前 1000 年頃定住してから三つの位置が確認されている。まずエペソⅠは、紀元前 6―7 世紀に栄えたイオニア連合の構成国であった。ついでエペソⅡは、紀元前 560 年頃ルディヤ人がエペソを移してしまった。エペソⅢは、アレキサンダー大王の後継者の一人リュシマチュウスは、紀元前 325 年町を引っ越してしまった、この町はパウロ時代の都市であった。現在のエペソが4回目の都市である。25 万人の人口を持つ小アジアの首都であり、自治権を持った自由都市が「最初で偉大なる大都会」とエペソのコインに彫刻されている。

この町の建造物<sup>27)</sup>は、ダイアナを祭るアルテミス神殿で、7回破壊されて7回再建されたといわれる。220 年間で再建されるたびに少しずつ拡張されてきた。このアルテミス神殿では、売春の実践をする礼拝であり、町への訪問者が落とすお金で富みを蓄える事ができた。競技場は 30 メートルと 230 メートルのU字型であるが、今は観客席の石が聖ヨハネ教会を建てる時に代用されてしまった。聖母マリア教会は、使

徒のヨハネがイエスの死後、エルサレムからマリアをここに案内して、死ぬまで過ごした家で、現在の建物は 6 世紀に建てられたが、その土台はもっと古いとされている。ケルスス図書館は、ローマ帝国のアジア州執政官ケルススの死後息子が彼の墓の上に記念として建てた建築物で、現在のは 1970 年代に修復された 2 階建ての正面だけである。正面の四体の女性像は、知恵、運命、学問、美德をそれぞれ象徴している。この支えている大理石の円柱は、下部がコンポジット式（コリント式とイオニア式の混合形式）、上部はコリント式の柱頭となっている。この図書館の蔵書は 1 万 2 千巻で、アレキサンドリア、ペルガモについて世界で 3 番目であった。



ケルスス図書館

パウロが訪れた町では、エペソはローマについてもっとも大切な都市であった。第 2 回伝道旅行<sup>28)</sup>で来ており、第 3 回では 27 ヶ月滞在している<sup>29)</sup>。パウロがエペソのクリスチャンにエペソ人への手紙を、エペソの若い牧師テモテへの手紙 1, 2 を書いたのもこのエペソの町であった<sup>30)</sup>。使徒の一人ヨハネは、マリアをエペソに連れて来てから紀元 60 年頃までエペソに住み、皇帝ドミティアヌスの治世にパトモス島に追放された。後に赦されてエペソで死んだ後、聖ヨハネ教会がこの墓の上に建てられた。時が流れて紀元 431 年と 449 年に宗教会議が行われて、マリアはただ単にある男の母ではなくて、神の母であるという聖性が決定されたのもこのエペソの町であった<sup>31)</sup>。



イエスの奇跡

パウロを待ち望んでいたのはテント職人のアクラ夫妻であった<sup>32)</sup>。ある日アレキサンドリア出身でアポロという若くて信仰の深いユダヤ人聖書学者がエペソへやって来て、イエスがメシヤであることを会堂で教えていた。しかしアポロが教える洗礼者ヨハネの悔い改めによる救いの信仰だけでは不充分だと知って、アクラ夫妻はアポロに、悔い改めは聖霊の働きによるものであり、聖霊のバプテスマを受ける事が重要であるというイエスの信仰を教えたところ、彼は謙虚な気持ちでこれを聞いて真摯に受け入れた結果、本当のクリスチャンとなることができた。その後アポロはコリントへ使わされて篤き信仰のあるクリスチャン指導者として大活躍をしたのである。

一方パウロは、エペソに到着してから多くの弟子たちに出会い、真の信仰であるイエスの教えを説くと、彼らはそれを受け入れると聖霊に満たされて真のキリスト者となり、益々福音が広がり、小アジア全体にイエスの福音が伝えられて伝道旅行が大成功となった。

さて、旅も終わりとなり、エルサレムへの帰国は、海路を南下してミレトス、ロードス島を経由してパタラ、そこから海路でツロに向かい、陸路でトレマイ、カイザリヤ、エルサレムへとたどり着く事になる。

### Ⅲ まとめ

パウロの足跡を旅してみると、聖書を通して彼の思いがひしひしと伝わるような気がする。彼を批判する人には、ペテロやヨハネと違って使徒として目撃証人ではないとか、手紙や説教と本人の実像との隔たり、「正気ではない」という理由があてはま

るのかもしれない。しかし彼の激しくて強い信仰が遠くアジアやローマへと伝道に駆り立てた原動力となっているのは間違いない。牧会者としての弱さを見せたペテロは牧師として信徒の心を捉えた。伝道者として信仰と福音を見せたパウロは雄弁な伝道者として信仰の種を蒔くことがパウロに与えられた働きであった。最後にエペソ 2 : 10 を引用しておきたい。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

## 註

- 1) 新改訳『聖書』使徒の働き, 日本聖書刊行会, 1988 年, 9 : 1-21
- 2) Ibid., 13 : 1-14 : 28
- 3) Ibid., 15 : 36-39
- 4) Ibid., 8 : 24-19 : 10
- 5) Ibid., 24 : 27-27 : 44
- 6) Ibid., 15 : 1-30
- 7) Op.cit., ヨハネの黙示録 3 : 14-3 : 22
- 8) Op.cit., コロサイ人への手紙 1 : 7, 4 : 12-13
- 9) Op.cit., ヨハネの黙示録 3 : 7-13
- 10) Fant, Clyde E., and Mitchell G. Reddish, A Guide Book Biblical Sites in Greece and Turkey. (Oxford: University Press, 2003), p.300.
- 11) Op.cit., 使徒の働き 3 : 1
- 12) Fant, C, op.cit., p.318.
- 13) Ibid., p.319.
- 14) Op.cit., 黙示録 2 : 18-29
- 15) Op.cit., 使徒の働き 19 : 10
- 16) Op.cit., 使徒の働き 19 : 10
- 17) Op.cit., 黙示録 2 : 12-16A & C Black
- 18) McDonagh Bernard, Turkey: The Aegean and Mediterranean Coasts. (London, A & C Black, 1989), p.529-532.
- 19) Fant., C, op.cit., p.331.
- 20) Op. cit., 使徒の働き 16 : 8-13

- 21) Ibid., 20 : 6－12
- 22) 『地球の歩き方：イスタンブールとトルコの大地』ダイヤモンド社，2004－2005 年版，  
p.193.
- 23) Op.cit., 使徒の働き 17 : 16－34
- 24) Ibid., 18 : 1－22
- 25) Ibid., 18 : 24－19 : 10
- 26) Op.cit., 黙示録 2 : 1－7
- 27) Barrett, C.K., The New Testament Background: Selected Documents, (New York, Harper and Row, 1961).
- 28) Op. cit., 使徒の働き 18 : 10－21
- 29) Op. cit., 使徒の働き 19 : 20
- 30) Ibid., 1 テモテへの手紙 1 : 3－4
- 31) Tucker, Alan. Editor. The Berlitz Traveler's Guide to Turkey. (New York, Berlitz, 1992),  
p.306.